

専門科目を極めつつ、実践経験も

専門として取り組んだ科学哲学では、哲学という学問の積み上げを元に、科学の意義や責任を議論することの重要性を痛感しました。一方で、大学博物館での活動にも関わり、イベントの企画・運営に携わる実践経験も得ました。科学コミュニケーション講座では、できあいの「科学コミュニケータ用カリキュラム」が用意されているわけではありませんが、専門的な学問を追究できる環境と、開かれたチャレンジの機会があります。そんな恵まれた場で得た「オーダーメイドの学び」の経験は、私にとって、自分らしい科学との付き合い方を模索する不可欠な土台となっています。



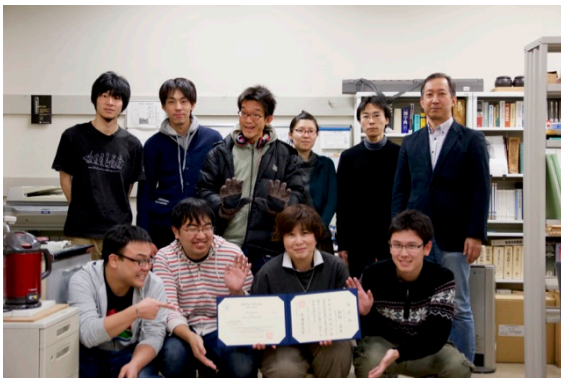
井上 拓己 Inoue Takumi
平成 20 年 修士課程修了
(現在、山梨県立科学館天文担当学芸主事)

科学者の“第二の実家”

自らの思考を鍛える場としての科学哲学領域

私自身の入門前の専攻は、看護学という後発の科学分野です。観察事実から生産された知識を実践で活用しようとしても勝手が違うということ、理論と実践を往復する経過の中で感じてきました。そして、どうしても解決できない問題に直面し、矛盾のある知識を後世に伝えることに困難を覚えたことがきっかけで、科学哲学の門を叩くことになりました。

科学哲学の知識は、外から飛び込んだ者には捉えにくいところがあり、哲学に馴染みが無い方は(私自身がそうであったように)苦勞すると思います。ゼミでは、言葉が通じず理解できないと感じてストレスを覚えるかもしれません。しかし、そのような時も諦めずに科学



哲学の議論の文脈を捉えようとし(ゼミがその場を提供してくれます)、それと並行して自らたてた“問い”に対する解を見つけようとする営み(これは自力で進めます)を続けていけば、知識間にはどこかに接点があり、分野は違って基礎でつながっていると確信が持てるようになります。私自身は、自らが抱いていた理論と実践(現実世界)の断絶の不思議が古くから存在しているもので、そ

れを解決しようとしてきた人たちが存在していることを知りました。研究の過程で、知識を介して大勢の人に支えられていることを実感するのです。

こうして、科学哲学の場に身を置きながら、自らの問いに向き合い続けて探究を進めると、少しずつ、科学哲学の視座に近いところから問いに解を与える道筋を探索できるようになっていきます。哲学は、色々な知識とつながっていますから、困ったときには周囲の院生や教員に相談してみると、解を導く糧となるような示唆が得られます。逆に、それは違う、あるいは、理解されていないと直観するようなこともあります。それ自体とても大切な探究の糧になります。こうした日常のコミュニケーションを経て、しだいに、自らが当たり前だと思っていた専門的知識を客観視することができ、結局は自らの問いに解を与え、それを他者に理解できるように説明することへとつながっていきます。

科学の知識に真剣に向き合い、オリジナルの発想と思考を言葉にすることで社会に貢献してみたいと思う方、科学領域の知識体系における矛盾を解消し専門家として一貫性を保持した説明能力を養いたい方にとって、科学基礎論研究室は学問上の第二の実家になることでしょう。



新納 美美 Niiro Mimi
平成 28 年 博士後期課程修了